

平成十九年十二月九日 予餞会記念講演

「激動の世界と日本」

防衛大学校長 五百旗頭 真 先生

皆さん、こんにちは(塾生「こんにちは」)。今日の卒業式は、卒業式にあたる行事と聞いてまいりました。

和敬塾では、ある志をもって共同生活されるということですね。しかし、今という時代は、圧倒的にひとりっ子が多い。皆さん、ひとりっ子の人はいますか。(挙手は少ない)これだけ? あんがい兄弟の多い人が多いですね。二人、三人兄弟以上の人は。(大勢が挙手) おお、そうですね。これは珍しい。それでは、あらかじめ共同生活には家庭から慣れておるといふ人が多いのかもしれないですが、現代は圧倒的にひとりっ子が多くて、大事に大事に育てられる時代です。こちらはけっこう規律が厳しいと聞きますので、そういうところから和敬塾に入るとつらくないですか。しかし、これをつらいというならば、防衛大生はもつとつらいですね。皆さんは一人部屋だそうですが、自分の部屋だけでも自由な空間があるということはないへん大事です。しかし、いまだとき防衛大は八人部屋で

やっております。戦後、貧乏なときに八人部屋で出発いたしました。その後、次第に日本は物的に豊かになり、また個人の尊重という理念もあり、欧米並みにだんだんと四人部屋から二人部屋にしました。二十年ぐらい前のことです。多くの人は自律性、自主自尊ということを自らマネージできるわけです。ところが、二人部屋にした結果、二千人の学生の中にはやはり一定の率で「監視がきかないならば好き勝手するさ」という自由のとり方をする人が当然います。社会どこでもそうですし、特に戦後のこの社会ではそうです。そういう人たちがびつくりするような事件を連発してくれた。皆さんは個人として自己を確立し、そして社会で意味のある、パブリックに役立ちたいという志をもって生きようということでしょうが、防大生もそうであります。それに加えて防大生は、国家危急のおり、一番大変なところで働く。その場合に、自分が犠牲になることも覚悟しなければならぬ。そういう精神でやらなければいけないわ

けです。ときどき不祥事があるということではダメで、やはり国防であれ、大災害であれ、PKOであれ、戦える人間になるためには、早く集団生活に馴染まなければいけない。というので、せつかく二人部屋までいったのを、四人部屋、八人部屋に戻しました。その中で厳しい試練を越えていくということと同時に、人間らしい、自らの志をもった幹部自衛官——エリートですから、奴隷のような服従ではいけないですね——そういうリーダーシップを築く教育のあり方を目指して現在に至っています。それに比べれば、皆さんは個室という自由の空間をもちながら、その中でいけば自発性をもって自己を確立し、社会の中で意味ある貢献をしていこうとされるわけで、大変恵まれた機会を手にしていらっしゃるとうれしく思います。ぜひがんばってください。

今日いただきましたテーマは「激動の世界と日本」ということですが、歴史的に日本と

いう国、あるいは民族がどういうふう国際社会の中を生きてきたかということ、大きく振り返りながら、なるべく最近の状況をお話ししたいと思います。

ところで、皆さんは男子のみですね。防衛大は六%が女子学生です。来年から九%にする予定です。女性に会いたい人がいたら、何なら防大においでください(笑)。しかし、やはり問題もある。学生舎は別に女子寮を建てるわけではなくて、ある一角を女子学生用にしてあります。もちろん部屋は別です。このあいだ、「学校長、処分の決裁をお願いします」と言われました。どんな大変なことが起こったのかと聞いたら、男子学生がビールを飲んだ勢いで女子学生用の洗濯物干し場に侵入しようとしてドアを開けたというんですね。それを処分しろというわけです。「ドアを開けた」というから、「それでそのあとどうしたんですか」といったら、「いえいえ滅相ありません、それだけです」「それで処分するんですか」。そんなことなら私はいつもしていたとはいわないですけども(大笑、拍手)。私なりに学生たちと取っ組みあっております。私は六十三歳ですけども、そのわりには若くて元気です。

先ほど私をご紹介くださったときに、スパルタ教育で有名な神戸の六甲学院の名が出ましたけども、私はあそここの山岳部で訓練し

ました。全校生徒にとって一番へビーなのが、真冬に六甲山の麓を一周する六〇キロマラソンです。狂気の沙汰でしょう。私はそれに、中三、高一、高二と、三年連続優勝しました(会場より感嘆の声がある)。六甲学院は文武両道の教育です。その後四十年間学舎をしていたのですが、防大の校長になって何かしら親近感を覚えると思ったら、学生生活の前に六甲学院で山岳部をやっていたことを思い出しました。その頃の規律や団結、支えあうという考え、それから自分の限界とはなにかということ。自分でこれが限界だと思っても、この先にまだ広がりがあるので、例えば山岳部で、中二ぐらいから毎週土曜日に六甲山を歩かせてもらいます。あれは大好きで幸せだったのですが、中三になると重量運搬が加わる。三〇キロからの砂袋をかついで歩かされたのです。もう意識もうろう、ほとんど失神しそうになって、やっと帰ってきて倒れこむように荷物を放りだし、ああ着いたと思ったら、高二のリーダーが「グラウンド十周」とかいつて叫ぶわけです。こいつは鬼だ、我々は死にかけているんだ、と思いましたが、でも仕方がないからよろめくように走りはじめたら、それはそれでできる。もうあかん、と思った先にもまだ人間には潜在能力があることを、そういうことから感じている。初夏の暑いときにふらふらになって、今日

はもう俺バテて倒れるわ、と思っていたら、前のやつは砂袋に穴があつて砂がぼろぼろ落ちていくのです。いいな、こいつは軽くなって(笑)、俺はダメだ、と思っていたら、そいつが急な道があがるときに突然よろけて落ちそうになった。そこで、びっくりして支えました。せつかく砂が落ちて軽くなっていったのに、彼のほうがもつとバテていたのです。これは谷底に落ちたら大変だと思つて、危ない場所になったら、彼をちよつと押してやった。彼からは「ちよつと触ってもらつただけですごく楽になるわ、ありがとう」といわれて、そうやっているうちに自分がバテていたのを忘れてしまいました。人間にはそういうところがあるんですね。人を支えようと思つたら、いつしか自分も支えられていた。そのようなことを、防大生は毎日のチャレンジでやっております。

このあいだも富士演習場で、一年生の基礎訓練がありました。一年のときは陸海空の区別なく基礎訓練をやつて、二年から陸海空の要員別に二対一対一分かれて、七月の一ヶ月間は全国の自衛隊の基地へ行き、そこで訓練を受ける。富士の基礎訓練を視察に行つたら、射撃のやり方や照準の合わせ方、それから匍匐訓練をやつていた。ご存じないでしょうが、第一匍匐から第五匍匐まであります。第一匍匐というのは片手を地面について身

を低くしながら這って進んでいく。それに対して第五匍匐というのは、地面にぺたっと寝て顔を横にして鉄兜が絶対に上がらないようにしながら進む。学校長視察に行き、横でそれを見ていたら、泳ぐように進んでいくやつと、バタバタするけど全然進まんやつがいるのです。「どうなっているんだ。ちよっと私にもやらせてくれ」と言ったら、「本当ですか。気は確かですか」と言われました。「うん、やってみる」とやってみたら、「学校長、手のつき方がちがいます。これでやったら手を挫いたり折ったりします。こう置きなさい」。手ではなくて足で押すんです。なるほど、そうやればいくら足で急に進んだって手は折れないですね。あんがい私には才能があるということを見しました(笑)。つまり、ポイントは何となくかしようとする、もがくけど進まない。それに対して、足で押していく人は流れるように進む。というふうなことを、学生の中に飛びこんで、よい歳をしながらやっております。訓練部長に「ほどほどになさったほうがよいんじゃないですか」といわれながら、F15戦闘機にも乗り、G5という加速度も体験いたしました。それから、スキー訓練の際には、学校長として初めて、視察するだけではなくて自らも滑った。二十一世紀の安全保障は、今までのように訓練さえしておればよいというのでは

ない。きつといろいろなことが現実起こる。防衛省はいろいろ不祥事で皆さんにご迷惑をおかけしておりますが、そういうことを越えて、二十一世紀の安全保障の、最後のよるべとしての力量をつけていかなければいけないわけです。前置きはこれくらいにいたしまして、近代日本がどういうふうやってきて、現在、どういうところにあるかということ、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

さて、日本という国、どう思いますか。今もう黄昏時で、皆さんは前途洋々という思いをもっていないのではないのでしょうか。日本という国はもうそろそろお役御免になっただけではなくて、もともと大した国ではないということでしょうか。それとも日本という国はやはりユニークで大したものだと、なかなかの国だと思っております。どちらかに手を挙げるとしたらどうしますか。なかなかのものだと思う人。ダメだと思う人。三対一ぐらいですか。なかなか穏当なバランスかもしれないですね。私の歴史家としての実績に基いていうならば、日本はなかなか大したものだと思います。日本以外はできなかった世界的偉業を成し遂げていますね。それはどういうことか。近代の西洋文明が初めての世界文明です。今までローマ文明、中国の文明、

アレキサンダーの帝国などいろいろあつて、それらが「世界を制覇」したというような言い方をしますが、それは、その時点で知られている「世界」です。本当の意味で地球全体を覆う世界文明というのは、近代西洋が初めてつくりました。何によってか。産業革命ですね。それまで人力と馬力でしか動けなかった人類が、陸上でも海でも動力で動くようになりました。これはすごい。全然ちがってき、近代西洋文明が動力で動くようになったからです。彼らはそれを手にして、十九世紀から二十世紀初めにかけて地球を再分割する。西洋文明に接触したら、もうどの国も対抗しようもないというほど、圧倒的な火力と動力です。ですから、西洋諸国にとっては誠にすばらしい力を手にしたわけです。

かわいそうなのは非西洋諸国です。地球上がすべて植民地化され、むかし日本が文明の父母と仰ぎみていた中国、インド——唐天竺の文明のうち、インドはイギリスの植民地にされた。中国も、十九世紀半ばにアヘン戦争が起こると、イギリスにやられてしまった。それもあの小さな島国のイギリスが、全力をあげて極東にやってきて中国と戦ってやつつけたのならわかる。ところがちがうんですね。イギリスは世界中を経営している、そのほんの片手の、またひとつの指ぐらいで、中

国の林則徐の軍隊をやっつけた。それぐらい段も格もちがう。それほどに西洋文明諸国は強くなってしまった。

唐天竺ですらやられてしまうという中で、その沖合の島国である日本ごときは小指で弾くようにおしまい、というのが世界史の当時の常識だったわけですね。案の定、幕末にペリーの艦隊が浦賀にやってきました。それを幕府は鎖国政策という国是をもって止めることができない。それまでの日本は、外国がやってきたら、「そうですか、それでは我々の方針があるので長崎で待ってください。ここでは受け取れません、長崎で受け取ります。国の決まりですから」。それで、長崎に外国船がまわってうろろうろしているうちに季節が過ぎてしまう、台風が来てしまう、食糧もなくなった、帰らなければいけない。そういうふうにして、しのいできた。この幕府の戦法に乗ってはいけないということをペリーはよく研究していた。いま防大のあるのが横須賀の走水（はしりみず）ですが、走水から千葉の海岸のほうに富津（ふつ）というところがあり、走水・富津の線を越えると、江戸城が奥に控える江戸湾への侵入ということになる。国の禁を犯すことになります。ペリーはそのことを知っていて、そこをわざと通るのです。毅然として、断固として、制止を振り切って、そこを突き抜ける。自ら「これ

でルビコン川を渡った」と誇っているのです。その線を越えたところ、横須賀の沖合に猿島という小さな島があります。その島を「ペリーアイランド」と勝手に名づけているのです。そして羽田沖まで行って測量する。そのメッセージは明らかで、これで江戸湾の奥まで行って大砲をぶつ放せばどうなるか。江戸城炎上、少なくとも江戸の市中が炎上する。それを本気でやる気だぞと示して、長崎ではなく神奈川で大統領からの親書を受け取らせたのです。

意外にも日本は、その五十年後に西欧列強の中の軍事大国であるロシアに勝利するという、信じられない大番狂わせをやったわけです。それ以降、「西洋の世界史」であつたのが、「世界の世界史」に転換いたしました。それは、何によつてか。簡単なことです。産業革命以後、近代西洋がつくりだした力、その力の秘密は誰でも学ぶことができます。西洋であろうと、非西洋であろうと、誰でも学んで我がものにすれば世界史の主役になれるということを行ってみせたのです。いま、二十一世紀に勃興するのは、ブラジル(Brazil)、ロシア(Russia)、インド(India)、中国(China)のBRICSで、米英秩序の二十世紀とはちがうといわれております。その引き金をひいたのは、十九世紀後半から二

十世紀初めにかけての日本です。初めて非西洋、有色人種でありながら白人の西洋に戦いを挑んで勝つということをやった。つまり近代化というのは、誰でもやればできるものである。それを手にすれば誰でも世界史の中のアクターになれるということを行ってみせた。当時日本のみができた。一九六〇年代ぐらいまで日本のみがそれを行ってよかつた。今では中国はじめ東アジアの国々が、団体さんで猛烈に伸びて、近代化を遂げていますので、今では「日本が初めて」といわなければいけないでしょう。そういう意味で司馬遼太郎『坂の上の雲』の時代、日清日露の時代に新興国である極東の島国が世界史のアクターのひとりになるといふ大変な事業、この一事をもつてしても、日本はそんなじよそこらの国ではない、ましてやあかんなたれの国では絶対ない。

すばらしい実績と能力がある。なぜ日本だけができたのかというのは大きな問題で、これを話したすと昔のほうにどんどん遡ってしまい、現在の「激動の世界」まで辿りつきませんので、ただ指摘だけしておきます。それは日本が、西洋文明が登場する以前に世界で最も強力だった中国文明の周辺にあつて、そこから学んで高い水準を維持しながら、同時に自立性を保ちつつけていた。大変強い

「侍」の自立心をもって、支配は阻みながら学習だけは一生懸命する。その両輪をやってきたという、いわば「組織メモリ」とでもいうような、外国文明に対する対応の型を国民として持っていたわけです。それが、近代西洋がやってきたときに役立った。その経験があるから、同じ型を使って猛然と西洋のものを学習する。たしかに鹿鳴館の軽薄さはあった。上等舶来といつて西洋から来たものは何でもよしとした。洋行するということが、輝く天上の火を持ち帰る営みであるかのよう

に思っていた。それくらい浮かれて西洋一辺倒になったかに思えたけれども、しかしそれによって自分の文化を支え、高め、そして強化してやっていけるようにしたわけですね。伝統を失うという西洋学習ではなくて、猛然と学習するのですが、学習し、それをこなす

という立場を築きながら、世界のリーダーとして振舞うことができない。世界のリーダーになるために何より大事なことは、成熟した認識です。時代認識・国際認識ができないとダメなのです。相手を認識し、自分がわかり、そして何を行うか、という三つのことができなければいけない。日本は上にあがったあとがいけない。ロシアを打ち破り、その前に日清戦争で勝っていますから、アジアでは日本が唯一近代化した軍隊を持っていて、軍事的には強かった。アジアで戦えば、戦闘は必ず勝つ。

戦闘に必ず勝つというのは、すばらしい立場のようで意外に畏なのです。「人はその強きに滅ぶ」ということがあります。最近のアメリカを見てください。軍事的には、一、二位、三位、四位以下を全部足したよりアメリカのほうが強い。戦えば絶対勝つ。では、それによって圧倒的なリーダーシップを世界で確立しているかという、逆ですね。今ほどアメリカの評判が悪いときはない。ヨーロッパの仲間からまで批判され、中東アラブ方面にいたつてはまるで悪魔のようにいわれていますね。なぜか。戦えば絶対勝つというとき、人は安易に戦いすぎるのです。揉めごとがあつたり、言うことを聞かないという、サーベルをガチャガチャと鳴らして威嚇する。言うことを聞いてくれればよいけども

鳴らしておいて抜かないのは威信に関わる。抜いた以上はしつかり勝たなければいって残酷になったりする。

項羽と劉邦の故事をご存じでしょう。劉邦は戦は上手ではない、ただ人徳があつた。項羽は軍事的天才です。百戦百勝です。「百戦百勝は最上策でない」と孫子はいった。項羽は戦闘では必ず勝つ。勝つても勝つても人徳がないものですから、戦闘では必ず勝つが、何か揉めごとがあるとやはり力に訴える。戦後処理もむごい。というわけで、勝つても勝つても反発が大きくなる。戦では逃げることの多い劉邦のほうに天声人語が集まってくる。アメリカが「九・一一」のあと熱くなつてアフガンへ行ったのは、タリバンがアルカイダを匿っている以上、やむを得ないことです。アメリカのような強い国が国際テロ組織を始末してくれなければ、人類は枕を高くして眠れません。これは世界の公共性のための遠征だといつてよいでしょう。そのあとのイラク戦争はちがいます。あそこにテロリストがいたわけではない。サダム・フセインという独裁者はけしからん男だけでも、彼のもとではテロリストはおられないのです。独裁者の統治は完璧ですから、あれほどテロの跋扈から遠い国もない。外に対しては一九九一年の湾岸戦争で負けて力はないですが、内部の独裁はすごい。国内秩序は完璧だが、外には

悪いことができない状況というのは、ある意味、テロに対するうえで一番ありがたい存在です。しかし、アメリカからすると許せない。湾岸戦争で負けていながら態度が素直ではない、相変わらず反米を口にし独裁をやっておるといので、イライラする。相手の内在的事情を充分わきまえずに、テロとの戦いの名において始めたイラク戦争というのは、アメリカが剣を抜けば、もう本当に戦闘は一発で終わりでした。簡単に勝利した。しかし人々の心は支配できない。反発は非常に強くなる。というわけで、アメリカは今たいへん苦しんでいますね。

戦前の日本も同じことです。三〇年代の日本はまさにそうでした。アジアでは何しろ戦闘になれば必ず勝つから、例えば日本人の僧侶が中国大陸で三人殺されたという（一九三二年 日本人僧侶殺害事件）、世論がわーっと盛り上がる。そこで、平和的發展主義・経済主義をとる、戦前の幣原喜重郎外務大臣に「どうするんですか」と訊くと「いや、軍隊を派遣したりしません。相手の正統な代表者と平和的に解決いたします」「バカいえ。むこうに正統な代表者がいれば苦労せんわ。あんなふうにはガタガタしているところでもないことを言うからなめられる。毅然としろ」。「軟弱外交、対米追隨」と非難（こう）うでした。この「軟弱」という言葉は、戦前

から日本が戦争をしようというときの悪口の決まり文句ですね。これを言いだすと危ない。そのあと陸軍大臣であった田中義一が首相となり山東出兵というのを三度繰り返す。ちよつとした問題でも、日本の権益を守らなければいかんと、ぱっぱかぱっぱか出兵するんですね。その中で中国ナショナリズムと全面衝突になる。「日本は正統な条約で認められた既得権を守るためにやっているんだ。それを暴力で侵そうとする中国の変なやつら、匪賊がけしからん」といつてやった。しかし、国民のナショナリズムが高まるときというのは、外交の揉めごとがあつたりして、世論の振幅が激しいですね。日本は中国が乱暴であるというところだけを見ますが、遠くから世界的に見ていたら、これは中国のナショナリズムが高まってきているからだということがわかります。日本の日露戦争の勝利が、アジア各国のナショナリズムを高めた。その結果、みんな日本のようになりたいたい、日本のようになろう。西洋文明を学習しながら、西洋に負けない自立した立派な国になろうとしたら、立ちほだかっているのはなんと日本だった。したがって、アジアのナショナリズムは日本との対決に向かう。それを欧米諸国から見ると、日本は聡明さが足りない。簡単にいえば、よきリーダーになれない、よき世話役になれないということです。少なくとも

日本社会で偉い人というのは、自分で実績をあげて偉くなった人を指します。そういう人は自分のコミュニケーションの世話役ができないとダメなのです。自分の利益はもちろん大事。それは、人間そうすべきです。しかし同時にみんなの利益、そのコミュニケーションも大事です。皆さんだったら運動部かもしれないし、寮の中かもしれない。そのお世話がちゃんとしてきて、そのときには公平に、全体にとって、コミュニケーションにとって必要なことをできる。そういう人であつてこそ、彼はリーダーとして信認されるわけですね。よき世話役としての振舞うというのは、日本国内では当たり前で嗜みです。ところが、国際関係になるとそれができない。世話を焼くと「おまえ何をとってきた、やられっぱなしやないか、とられっぱなしやないか。おまえが甘いからそういうふうになるにされるんで、損ばかりしておる。日本外交はへただ」と言われる。しかし外交というのは、ちがった利害をもつた国同士の調整ですから、半分ずつ譲歩しなければいけないですね。うまくいっても四分六分、七三もいっただら勝ちすぎで、相手のほうに恨みを残す。でも、三でも四でも五でも譲つたら、そこだけを見て「おまえは弱い、もっと毅然としてやらないとなめられているぞ」と対外強硬派が言ってくる。そういうとき、元老・西園寺（公望）はよく言っておりました。

「日本外交が軟弱だといわれているあいだは安心だ。毅然として自主的に思い通りやっている、ということになったら大変なことになる」。一九三〇年代はそういうふうになったんですね。自主自立、自分の観点をもつ、力強いリーダーシップをもつ、それは大事なことです。しかし、自己利益ばかりを追求しては、いかなる社会も成り立たない。公益、全体の利益ということと、自分の利益を結びあわせるところにリーダーシップは成り立ちます。そのことを国内では当然の嗜みとして、国際社会になると、すぐ危機感過剰で「やられた」とか、「損をしている」というところにはかり目がいつてしまう。その結果、国際社会全体の中でよきリーダーシップを発揮する構想力が生まれてこない。これが戦前の破綻部分です。「ガンと行け」というので、戦争に次ぐ戦争、ついにアジアだけではなく、世界を敵とする戦争に陥って、一九四五年にすべてを失ったというのが、戦前の歴史です。簡単にいえば、我々の戦前の歴史は一勝一敗だった。世界的偉業を近代化の成功で成し遂げたけれども、しかし尾根筋にあがってから、乱れて崖から転落した。一勝一敗の実績をもつての戦後でありました。果たして戦後やっていけるのか。これで終わりののか。

今日ここに車で着きましたら、都心にありながら環境のよい、紅葉した木々の中で、これは東京の中かと思いましたが、すばらしいところにお住まいです。しかし、一九四五年の東京は廃墟でした。緑の多くは空襲で焼けて、家は全部焼き尽くされていた。ところどころ、どうしたのかな、ぼつんぼつんとビルが残っているという状態で、富士山がよく見えた。そのような時期に、もう一度日本が再建できるかどうか、誰も展望も出ないという状況でした。(昭和)天皇は「終戦の聖断」といわれるものの中で、「平和さえ得ておけばまた復興の光明も考えられる」と言いました。彼は復興の光明を信じて、本土決戦を避けて平和を得ようと考えた。自らそういうふうには臣下を説得したわけですね。しかし、彼に、日本が世界第二の経済大国に再浮上する展望があったかというところ、そうは思えない。国民全体で三二〇万の犠牲を出し、敗勢は明らか。世界でただ一人きりになってしまったのに、陸軍は、なお本土決戦でアメリカ軍を日本本土に引き入れようとした。上空一万メートルからB29で空襲されているときには手の出しようがない、やられるだけです。しかしアメリカ兵といえども、地面にあがってくれば、寝首掻いてでも相手にも犠牲を与えられる。犠牲を与えたいうでなければ、日本人の精神までダメになってしまう。だから、

ガッツを示すために本土決戦をやるべきだ。死中に活を求めるといって、陸軍は本土決戦を組織の立場にし、政府にも一度認めさせているんですね。したがって日本は本土決戦をするという状態になっていましたが、もしそれをやっていたらどうなるか。ドイツ、あるいはポーランドの第二次大戦の犠牲者は、三二〇万ではなくて七〇〇万です。二倍以上になっているわけです。なぜか。それは本土決戦をやったからです。日本も本土決戦をやっていたら、皆さんのうち何人が生まれているかわからない。陸軍がそれを主張していた。比較的全体から見ている昭和天皇からすると「国民をさらなる地獄に引き入れないでくれ、無理心中だけはやめてくれ、まだ復興の希望もないわけではないんだから」という説得のために「光明」と言ったままで、具体的展望があったとは思われない。そういう中で、ともあれポツダム宣言を受諾して、平和を得た。このあたりが実は私の研究の中心テーマで、アメリカの国立公文書館(アメリカ国立公文書記録管理局 National Archives and Records Administration)へ行くと、原資料を全部見て、いかにアメリカがポツダム宣言をつくり、戦後日本を再建するプランづくりをしたかという調査をしました。アメリカの歴史の中で一番よい仕事をしたのは第二次大戦のときだと思います。ドイツ、日本の挑

戦を退けて勝利に導くだけでなく、それだけでも非常に忙しくなるのに、それをやりながら新しい戦後世界をつくる。今までのように剣をとらなければ問題が解決しない戦後世界ではなくて、国連システムを一方で作くり、他方でブレトン・ウッズ（ブレトン・ウッズ協定 Breton Woods Agreements 一九四四年）という自由貿易体制をつくった。剣をとらなくても経済的機会は誰にでも与えられるシステムをつくらなければ、ドイツ・日本を叩き潰しても、また別なるドイツ・日本が出てくるからというので、新しい戦後世界をつくりました。その努力の中で、戦後日本の占領政策もつくったのです。ですから、人類史上さまざまな占領が行われた中で、最も被害が少ない占領だったと思いますね。よい占領とはいえないでしょうね。占領というのは厳しいものです。外部支配者が七年間にわたって支配するのが、甘いものであろうはずはない。しかし、人類史上のさまざまな占領をみれば、もっと過酷なもの、もっとひどいもの、もっと乱暴なものが多いですね。そういうのに比べれば、最も被害が少なくある。そういうことができた第二次世界大戦期のアメリカを、私は研究テーマにいたしました。

敗戦日本はどん底だった。しかし私は、昭和二十年のあのときから日本の復興ということを確認していたという人に、近年会いました。ジョージ・アリフィン(George Ariyoshi, 1908)という、ハワイ州の知事を十二年やった人です。国際交流基金日米センターの評議会に、年に二回、それぞれの国で合宿をする集まりがあつて、私はその座長をやっております。アメリカの政界代表がジョージ・アリヨシでした。夕食会のときにアリヨシ夫妻の横になったので、「日本に初めて来たのはいつ」と訊いたら、「昭和二十年の秋だ」という。昭和二十年というのは、アメリカの占領が始まった年です。「では、そのときの東京はひどかったでしょう」と訊いたら、「うん、家がほとんどなく、富士山がよく見えていた」「では、戦後日本がこんなふうに興るとは考えられなかったでしょうね」と言ったら、「うん、でもね、自分はあのときから復興すると確信していた」と言うのです。「どうして」と訊くと、このような話をしてくれました。

当時、有楽町の高架下を歩いていたら、街角で坊やが靴磨きをやっている。寒空の下、坊やは粗末な服しか着ていなかったけども、心をこめて一生懸命磨いてくれた。小さい子がよくがんばっているなど、ちよつと感動した。そのあと兵舎に帰って、あの子、あんな粗末なものしか着ず、食べ物もろくに食べていないにちがいないから、ちよつと喜ばせよう。優しい人ですね。兵舎で白いパンを二つに割ってバターとジャムをいっぱい塗りこんで、プレゼントしてやるうと思つて戻ったそうです。「坊やにこれあげるよ」といったら、遠慮するので、「君のためにわざわざもつてきたんだから受け取つてよ」「いいんですか。ありがとうございます」。パクつくと予期していたら、食わずにそのまま袋に入れたそうです。「どうして食べないの」と言ったら、「家に妹がいるんです」「妹さん、いくつ」「三歳でマリコっていいます」「君は？」「七歳」。七歳の腕白盛りのはずの坊やが、自分は腹ペコなのに食わずに、家にいる三歳の妹のために持つて帰る。こういうことのできる子が世界中のどこにいるだろうか。アメリカでは、靴磨き少年というのはシンピラヤクザの予備軍らしいです。『ウェストサイド物語』なんかで刃物もつて走り出す、あの予備軍が靴磨き少年らしいですね。そういう前提があつたからかもしれないですが、それからみたら、この七歳の坊やはどうしてこんなに立派であるのか。日本は物としては空襲によつてすべてを失つた。第二次大戦で物としての日本は全部壊滅した。しかし、日本人の精神はなくなつてないのではないか。七歳の坊やがこういうことができるのは、そういう家庭だったからだろう。それがあつた限り、日本人は絶対これで終わらない。必ず蘇る。そのときから確信した、とアリヨシさんお話し

やるんです。それ以後、あの七歳の坊やと三歳の妹マリコさんと再会できないかと思っ
て、いろいろなところで調べたけども、残念
ながらその後生きているのかどうかみつか
らないとおっしゃっていました。

ともあれ、そういう廃墟の中から再出発し
て、戦後日本をつくりだしたのは、主として
吉田茂という人です。吉田茂という人が、戦
後日本の国家目標を打ち立てました。敗戦で
失った基本的価値、安全、つまり国を失って
はいけないということと、食べるものが欲し
いということとです。食うや食わずで家族をど
うやって食べさせるか、お父さんお母さんが
いなくなったら、七歳の坊やが三歳の妹を食
わせなければいけない、そういう境遇の中か
ら経済復興して、みんなが食べられるようにな
りたい。もつと積極的にいえば繁栄が欲し
い。吉田茂は、「安全と繁栄」を戦後日本の
二つの国家目標にしました。失ったものであ
るだけに、誰でもよくわかる。国民がみんな
望んでいることを国家目標にするのはそう
むずかしいことではないのですが、政治家に
とって大事なのは、それを国際環境の中で成
り立つ政策パッケージにすることなんです
ね。どうやってやるかということを出さない
と、単なるスローガンになってしまふ。スロ
ーガンはよいけど、ちっとも進まないとい
うのでは困るわけです。吉田はこの「安全と繁

栄」をどうやるか、その二つに対して、両方
とも「アメリカ」というキーワードで応えま
した。

当時、日本・ドイツが潰れたあと、早々に
米ソ冷戦が始まりました。しかも日本は太平
洋をアメリカと隔て、ソ連の国に背中を合わ
せるかたちでいるわけです。島国ですから、
直接そのまま来ることはできませんが、例え
ていえば裏山に大熊がいて、大熊がのしのし
と歩いてくる。そして、敗戦によって武器も
刃物も失った日本は、大熊が日本にあがつて
きたら対抗できない、必ずやられてしまうとい
う状況なわけです。ハリネズミのように武
装しても、超大国ソ連にはまったく歯が立た
ないという状態です。そういう中で戦後日本
の安全をどうするか。吉田は、非常に評判が
悪かったのですが、日米安保条約を結んで、
ソ連よりももつと強いアメリカを番犬にす
るという選択をしたわけです。日本に米軍を
駐留させて、アメリカ軍を囲うことによつて
日本の安全の手段にしよう、それ以外に方法
はない。サンフランシスコ講和条約は五十二
ヶ国に祝福され、サンフランシスコのオペラ
ハウスで華やかに行われて、日本の政治指導
者も吉田首相以下、野党の党首まで含めてた
くさんの人が調印いたしました。けれどもそ
の後、金門橋のプレジデントという公園の中
の将校クラブ（プレジデントは当時陸軍基地、

現在は国立公園）で、吉田首相は誰も伴わず、
孤独な日米安保条約調印をしました。あまり
にも不評判だったから他の者を巻きこむの
をおそれ、「私ひとりです」と、全権委員
である池田勇人にもサインさせなかったの
です。しかし、これは、あの状況ではそれし
かない方法でした。アメリカという、ソ連よ
りももつと強い猛獣を番犬にする。もちろん
猛獣を番犬にしたら代償があります。家族が
食われるかもしれない。自立性を失うかもし
れない。そういう危険は伴っていましたけれ
ども、吉田は日本人さえしつかりしておけば
大丈夫だと考えた。何でもソ連のことを
聞かなければいけない東欧の衛星国と、西側
の自由世界はちがうと、のちの回想録でも書
いておりますが、ともあれ、それを選んでと
りあえず安全度は高くなった。

もうひとつの経済復興と繁栄、これについ
ても吉田は「アメリカ」だと言ってますね。
第二次大戦が終わったとき、ヨーロッパもア
ジアも戦乱で廃墟になっておりました。世界
全体のGNPの四五%をアメリカ一国によ
つて占められていました。豊かな国は世界で
アメリカしかなかったのです。そういう中で
敗戦国日本が蘇ろうとすれば、その援助・協
力が望ましい。という意味で、アメリカの豊
かさに近づくといいことを選んだわけです
が、もうひとつ大事なのが先ほどのブレト

ン・ウッズですね。G A T T (General Agreement on Tariffs and Trade 関税および貿易に関する一般協定)、I M F (International Monetary Fund 国際通貨基金)、世銀(世界銀行、World Bank)の体制です。日本は資源がないですね。資源のない国は豊かになれない、そういう常識があったとしたら、それを戦後日本は見事に覆しました。人材があれば大丈夫だというのが、日本が出した答えですね。皆さんのような志のある若者が支えれば大丈夫だと。しかし、そのためには貿易ができなければいけない。つまり、自分には資源がないが、世界の資源を利用することができるといふシステムにならないければならない。幸いにもアメリカが第二次大戦中ブレトン・ウッズでつくってくれたんですね。大西洋憲章 (Atlantic Charter 一九四一年) の言葉でいえば、「大国と小国を問わず、勝者と敗者を問わず、すべての国が資源と市場へのアクセスを平等にすることができるといふ新世界をつくる」といふのがアメリカの公約であって、それを戦争が終わるころ、本当にブレトン・ウッズ会議を開いてつくった。それがG A T T、I M F、世銀の体制ですね。大変立派だった。それをつくり、運営するアメリカと近しくいるといふことが、資源のない日本にとって生存の基盤だという洞察が吉田にはあったわけですね。

途中はもう時間の関係で飛ばしますが、これは見事に成功しました。一九六〇年代を中心とする奇跡の高度成長。吉田の弟子である池田勇人首相は、一九六〇年に、十年間でG N Pを二倍にするという方針(「所得倍増計画」)を打ち出しました。野党はできるわけがないだろうと批判しました。池田首相は「私は嘘を申しません。私の率直な気持ちは、十年間で日本のG N Pは三倍に増えると考えておりますが、しかしそのときの責任をとれないでしょうから、慎重にいつて二倍と云っておるのに、なぜ皆さんはできないと思ふのか」と言つてわつと議論を巻き起こしました。結果的に、一九六〇年代の十年間で三倍になったんですね。石油危機(一九七八年)まで十八年間、日本の高度成長は続きました。石油危機でカウンタートエイトのダウンを受けて、もうダメかと思われましたが、その中で日本人はもう一度一致協力、勤勉に、賭身のがんばり、プロジェクトXをあらゆる組織が秘めているという努力があつて、一九七〇年代の石油危機から蘇ると、日本は世界一のものづくり国家になりました。F A X、ビデオに至るまで、家電製品はもう抜群である。世界の市場を席卷いたしました。自動車もまた石油危機でガソリンが高値になって充分に供給もされないかもしれない、ならばガソリ

ンを消費しないエンジンを開発しようといふので、科学技術の努力を猛烈とやったわけですね。そして燃費効率のよい自動車をつくりだしました。それは一九八〇年代の世界市場を席卷した。アメリカは全部の家電会社が潰れました。自動車会社も次々に潰れて、残るはビッグ3だけ。そのナンバー3のクライスラーが経営危機になったとき、アメリカは日本に、待つてくれ、これ以上やられたらアメリカとしてもやっていけない、と政治的に働きかけてきました。つまり自由貿易の原則は潰したくないが、日本の対米自動車輸出の制限に合意してもらいたいと、自主規制の名において、日本の集中豪雨的輸出を抑えるといふ交渉が行われました。言い換えれば、一九八〇年代の日本は世界一のものづくり国家。工業製品の競争力において、ヨーロッパはおろかアメリカも太刀打ちできないくらい強くなつたんですね。その中で、日本の豊かき、繁栄といふのは完璧なものになりました。

こうしてみると、吉田が計画した二つの国家目標「安全と繁栄」は二つながらに戦後日本は見事にやり遂げました。世界のどこの国よりも「安全と繁栄」といふ点において、日本ほど成功した国はありません。西ドイツもずいぶん経済復興いたしました。「勝者と敗者とを問わず」の敗者がぐーんと伸びました。

しかし、日本ほど廢墟からの出発点と、繁栄の到達点の差が大きな国はない。そういう意味で、戦後日本は吉田路線において、西側自由民主主義の社会を築くということに成功した。これは立派なブランドである。

特に注目していただきたいのは、世界で最も格差の少ない豊かな社会を築いたことです。皆さん、認識があたりでしょうか。高度成長するとき、ぐんぐん伸びるときというのは、世界どこでも格差が広がるんですね。昔、産業革命期にイギリスでチャーチスト運動(※)というのがありましたね。それは、資本家はどんどん儲けるが、労働者との格差がひどいものになるということに対する憤りですね。いま中国をご覧ください。沿岸部は、日本の一番高い米や果物がいくらでも買えますよ、お金が余って大変ですから、という繁栄。それに対して内陸部は、電灯もあるかないかという状態です。こんな格差ですね。それは、中国の聡明な指導者である鄧小平——この人は文化大革命を收拾して、一九七〇年代末から中国の指導者となって今の中国の経済発展をリードしました。一九八〇年から三十年、オリンピックが終わり、上海万博が終われば三十年。三十年間の高度成長を中国は続けているんですね。日本は十八年間続いて奇跡の高度成長といわれました。中国は「超」奇跡ですね。三十年も続けているので

す。それをスタートさせたのが鄧小平だった。この鄧小平のもとでの経済発展。彼はいろんなおもしろい言葉をいったのですが、「白い猫でも黒い猫でもどつちでもよい、ネズミをとる猫ならよい」。つまり、資本主義体制でも共産主義体制でも何でもよい、国民を豊かにする経済であればそれでよいというので、彼は国際的な市場経済の中に中国経済を入れたわけですね。それによってこの三十年の高度成長が可能になったのです。そのときの言葉が「先富論」ですね。みんなが貧乏であるときに、社会主義だから平等に、といつてなけなしのリソースをみんなに平等に分けたらどうなるか。みんな食べるだけで終わってしまいます。こういうときには資本を集中して、ぐーんと伸ばすところを伸ばしていく。そして結果として全部が伸びるように組んでいく。これが必要だ。戦後日本の傾斜生産方式というのはそういう考えでした。「先富論」により、中国は沿岸部からぐんぐん伸びはじめた。ところが、あまりにも格差がひどい。私は新日中二十一世紀委員会という日中のワイズマングループ(賢人会議)のメンバーですが、去年、そのグループで温家宝首相に会いました。そこで「何か温家宝総理に訊きたいことはないか」と言われたので、「ではうかがいます。中国は今後も平和的發展主義を採られるつもりですか」と訊きました。

ご承知のように中国は経済発展も三十年続きますが、同時に軍拡もすごいですね。戦後日本は、軍事費をGDP1%以下のところに自制して、経済発展はするが軍事大国にならないという自己目標をもって進んだ。ですから、平和的發展主義を続けていますが、中国は軍事革命の成功から出発した社会ですから、「総合国力論」といって、経済力と軍事力の両輪を延ばしていくという考えです。ですから、経済がこれだけ三十年間高度成長したら、その全体比率よりも高い比率で軍事予算が膨張します。それをやっていると中国は軍事的覇者として軍事国家になっていく趨勢が出てきます。温家宝首相に「今後の中国をどうするつもりか、経済的發展主義を続けるつもりがどうか」と訊きました。彼はそれに対して「あなたがおっしゃったような、戦後日本のような格差のない平等な豊かさということを我々はもっていない。残念ながら沿岸部と内陸部の格差はすさまじいもので、しかし我々の政府はそれを克服して真の現代化を達成しようと思っている。そのためには数世代、いや十数世代かかるかもしれない。その間、中国は平和な国際環境を必要とする。対外戦争のほうにエネルギーを振り向けてしまったら、この大きな格差を越えて、平等と豊かさを中国国民全体に広げることができなくなる。それをするために、平和

な発展方式というのは、一時の術策ではなく、長期にわたる基本政策である」と二十分も熱弁を振るわれました。胡錦濤と温家宝のトップリーダーがそう考えているというのは、本気だと思えます。このたびの党大会でも、「和諧社会」、調和した社会と違って、経済発展ばかりをいうよりは、環境・エネルギー問題をやらせて、そして平等性を回復するということを党の方針にまで打ち出しましたから、本気なのでしょう。しかし、できるかというところ、これはとてもむずかしいですね。中国の实体は地方政府の連合体であり、各地方は発展至上主義です。中国という体の至るところが、つまり地方政府が発展を求めている。そんなことしたら公害で息ができなくなるだろう、水も飲めなくなるだろう。それはそうだけれども、工業発展を止めるわけにはいかない。今そのせめぎあいの中で苦しんでいます、しかし、体のすべてはやはり発展を望んでおります。それを召し上げて、所得再分配を中央政府が強引にやる、そのような力はあるの独裁国にも実はない。そういうふうで考えると、戦後日本がなぜ経済発展の中で、富の格差ではなくて、一億総中流というような平等に向かったか。このほうが奇跡なんです。なぜできたという議論をしたいですが、それをやっていると話が進みませんので割愛いたします。

日本が石油危機から蘇って一九八〇年代の繁栄に入る時期に、今に至る世界史の大きな分岐点がある。一九七九年に注目する人はいいのですが、歴史家として私は注目していません。この年に、世界史の中の方向性に大きな変化があった。中東のイランではパーレビ国王 (Mohammad Reza Shah Pahlavi) の親米政権が潰れ、ホメイニ革命が起きました。イラン革命です。今の、自爆テロを恐れないイスラム原理主義が跋扈する状況というのは、一九七九年のホメイニ革命から始まりました。イランのアメリカ大使館を占拠した過激派に対して、当時のアメリカのカーター政権は手も足も出ない。救出活動をしようと思っただけで、砂嵐でヘリコプター部隊がやられてしまった。アメリカはベトナム戦争で傷ついて、今からは考えられないほど、一番どんだ底でした。イスラム原理主義過激派の人たちが、大使館と外交官を人質にするという明白な国際法違反をやっているのに、アメリカはどうもできなかつたですね。これでイスラム過激派は盛りあがりまして。やればできるんだ、アメリカなんて怖くないというので、今に至る中東のむずかしい時代がスタートしたのが一九七九年です。

その同じ年に、我が東アジアでは鄧小平が改革を收拾して、そして市場経済の中で経済再建を図り、堅気の国づくりを改めてやるという方向をとつたんですね。皆さんご存じかどうか、ハンチントン(Samuel Huntington, 1927)という人が『文明の衝突』という本を書いております。このなかで、アメリカおよび西側文明にとって今後の脅威は、イスラム文明と儒教文明、つまり中国が結託してアメリカに挑戦することだというふうな構図を示したんですね。私はこれはまちがいだと思う。一九七九年に中国は市場経済をマスターしながらいわば世界のブレトン・ウッズの体制内で大をなそうという道を選んだんですね。それに対してイスラムは原理主義の暴発で、普通的手段ではないやり方で、外からアメリカの秩序を叩き壊そうという、中国とはちがうアプローチをとっている。しかし、この二つが二十一世紀の世界史にとって重大課題である。その意味で一九七九年は重要です。

あとはもう東アジアだけに絞りますが、東アジアで強くなった一九八〇年代の日本は、立派なことをしました。戦後、格差のない豊かな社会、自由民主主義の社会を築き、世界に文化的に好感される、こういう中身をつくただけではなく、そういう経済主義的な、平和的發展主義のあり方を東アジア全体にいわば輸出したんですね。日本、NIE S (Newly Industrializing Economies 新興工業経済地域) — 韓国、台湾、香港、シン

ガポール——小さい、政治的に問題のある国だけれども、小粒ながら工業化、近代化を遂げていくNIEES諸国、そしてASEAN諸国（Association of South-East Asian Nations 東南アジア諸国連合）。「雁行形態」と呼ばれた、日本が先頭を飛んで引張っていくという経済発展連鎖。そこに一九七九年の鄧小平の改革開放によって、中国が殿（しんがり）についたわけですね。そしてベトナムがあとに続く。というわけで、東アジア全体が、南の国から北の国への大旅行を開始したんですね。これは日本が先頭を切ったということ、そして強くなった日本経済がよき世話をやったということが大きいですね。あまり評価されておりませんが、実は一九七七年に、今の福田康夫首相のお父さんの福田赳夫さんが、ASEAN首脳会談に招かれてスピーチをしました。そのスピーチが「福田ドクトリン」と呼ばれております。何を言ったか。「日本は経済大国になっても軍事大国にならない」。リアリスト（現実主義者）と呼ばれる国際政治学者は、「経済大国はみんな政治大国から軍事大国になる。これはニュートンの万有引力の法則と同じぐらい正しい」と考えております。そういう意味からいえば、キッシンジャーなんかは「日本はいつか必ず核武装する。経済大国が経済だけで終わることはありえない」と言っています。

す。しかし、福田首相は、「日本は軍事大国にはならない。そして、アジアの諸国民とのあいだで、心と心の触れ合う友情を築きたい」。「Heart to Heart」というのがスローガンでありました。そしてASEAN諸国、アメリカを叩きだしたベトナム、インドシナを含めて、東南アジア地域全体の経済発展に日本は力を尽くしたい、地域全体の発展と安定のために日本は力を尽くすと言ったわけですね。これが大変な感銘を与えました。時は、ベトナム戦争が終わってアメリカが撤退していく頃です。このあと、この力の真空はどうなるのか。どういう秩序ができるのか。展望がないときでございませぬ。ソ連がベトナムのカムラン湾の軍事基地を強化して乗り出してくる姿勢を示している。ASEANからすると「勘弁してくれ、アメリカが帰ってもう一方のソ連が来るのは」と。「中国？ これもちよつと困ったものだ」。そういうときに日本の首相を呼んでみたら、大変洗練されていた。簡単にいえば、日本は「北風」として、かつてのような軍事大国で剣をもって東南アジアに殺到してくるのではなく、「太陽」として皆さんのお役に立つ存在として復帰したいという立場だった。これだ、とASEAN諸国は日本をいわば兄貴分にして、以後発展する。言葉だけではなくて、それから三年間のうちに日本からのODAは二倍にな

りました。その後五年間でまた二倍になりました。東南アジアの経済発展のインフラを支えた。今まで貧困というのはなかなか克服できずにどうにもならないと思われていた。それが日本によってインフラが整備されて、港湾が整備され、道路ができ、停電がなくなる、日本の優良企業が現地に直接投資して工場をつくるわけです。そこから世界に輸出していく。東アジアの国々が工業製品輸出に変わっていく。そういうふうには日本がお役に立ったわけですね。こうして、東アジアの国々が団体として発展していく。日本は少なからずその世話をしました。日本人は謙虚でいけませんから、「俺がやった」と言いませんけれども、実際に非常によくやっただけです。その結果、一九九〇年代までに、東南アジア諸国で日本の戦争のことを悪しざまに非難するということがなくなりました。もちろん日本に対する不満は今でもあります。それは「日本はけしからん」ではなくて、「日本ほどの国がどうしてもつとよきリーダーシップを発揮してくれないのか。中国ばかりでは困るんだ」というのが今の要望です。その中で、息子さんである現在の福田首相は、アジア外交を活性化させようとしています。アメリカとアジアを二者択一して、アメリカを選ぶかアジアを選ぶか、というような幼稚なことを言っていたら絶対ダメですよ。

アジア外交やるなら反米、そういうことを言っただけです。例えば北朝鮮が核のミサイルで攻撃しようとする場合、どうでしょう。残念ながら日本は自前で自国を防衛できません。専守防衛です。亡くなられた高坂正堯（こうさか・まさたか、1934-1996）という京都大学教授のことを覚えていらつしやる人はいるでしょうか。あの人が「日本は「一か八か」といつておりました。「承知の通り、日本の軍事費はGNPの1%です。ヨーロッパは3%ぐらい、アメリカは4%。あんな経済超大国なのに4%です。日本はその三分の一、四分の一です。なぜそれですむか。簡単であって、日米安保条約を結んでアメリカを番犬さんにして、国際協調主義でヨーロッパとの協力関係をG7サミット等でつくった。つまり国際的な連携の中で専守防衛だけをやっているから1%でいいわけです。この国際協力関係を断ち切って、もし単独で、自己完結的に安全保障をやるうとしたら何%要るか。8%要ります。GNPの8%の軍事費を投入しなければいけない。二倍以上の経済規模をもっているアメリカが4%ですから、その半分に満たない日本は8%やってもアメリカの域には達することはできないし、現在の安全度はがた落ちです。それでも、北朝鮮に脅かされて屈服するわけにいかない。自立を守るためにやらなければいけない、そし

て中国の台頭ということを考えると、狂ったように軍拡、核武装をやっても、今よりも安全度が下がるんですね。どれだけ国際的連携が大事だということを教えているわけで、高坂先生は「一か八か」というおもしろい言い方をされました。それを考えると、参議院選挙で勝って意気のある小沢民主党が、日本がやっているインド洋での給油をやめさせようというのは、大きなまちがいです。それは「八」への道を開くことですね。インド洋での給油というのは、日本が先頭切って戦っているわけでも何でもない。後方支援で給油をしているだけです。しかし、そういうことは、日本のような技術を持つ、海上自衛艦をしつかり持っている国でなければできない。だから、すごく感謝されております。日米同盟だけでは不十分です。世界中がテロから安全を得るためにアフガニスタン攻撃は必要だと認めて、ヨーロッパは犠牲を払いながら、参加している国はみんな一桁の犠牲者を兵士のうちに出しながら、なおがんばっている。そういうアフガニスタンに、日本は兵隊は送らない。しかし、日本は給油の面で、日本にしかできないところ、危険はないけれども非常に役に立つことをやってくれているという評価を得ているわけですね。それをやめるということは、何かのとき日本は単独でやれるということになります。日米関係もぐらつく

し、国際的な協力関係もなくなっていく。PSIってご存知でしょうか。大量破壊兵器等の密輸をやっている船を捕まえるという国際的な取り組みですね（Proliferation Security Initiative 拡散に対する安全保障構想 二〇〇三年、アメリカ提唱）。このあいだも国際共同演習が、相模湾、伊豆大島沖で行われました。私は斎藤（隆）統合幕僚長に誘われて二人でヘリコプターに乗って視察に行つて、船の上に降りてみました。そうしたら、不審船は六万トンか何かのアメリカの船です。もちろん演習ですから見立てているだけです。それに対して「いかずち」だったかな、何千トンかのかわいい駆逐艦レベルの護衛艦が、不審船に対してストップをかけて、ゴムボートで三十名ほど乗って上がっていくんですね。それを見ていて、私は非常に心配な姿だなと思いました。仔犬が大熊に襲いかかるような感じですから、十倍の大きさをもっている不審船が牙を剥いて逆襲してきたらどうするのか。やられるだけではないかという思いでしたが、水平線の彼方を見て納得いたしました。あちらにはアメリカの艦隊、こちらにはイギリス、こちらにはフランスの軍艦。むこうにはオーストラリア、ニュージールランド。水平線の彼方、そこそこに連合軍の軍艦がターッと並んでいるんですね。ああ、これはどんなに大きい

六万トンの軍艦であつても降参するしかない。つまりそういう背景をもつて、日本の小さな船が勇敢にも不審船に上がつていくわけですね。決め手は不審船対日本じゃないんですね。水平線見渡す限りにあちこちにいる連合軍の艦隊なのです。これが、日本がこんなに小さくても意味のあることができる所以なのです。インド洋での給油反対といつて、そういう国際協力の枠組みを捨てることは、自らの生存の基盤、安全保障の基盤を危うくする。そういうことを克服して、日米、基本的にやつていくということをもたなければいけませんし、大事なのはそういう中で外交的なたくましさをもつことですね。

何が大事か。二十一世紀の日本外交にとって大事なのは何か。ひと言でいえば、「日米同盟」プラス「日中協商」です。日米同盟、これなしには日本は自前で安全を確保できません。ですからこれは大事です。しかし、だからといってアジアをぞんざいにするようではダメです。特に、アヘン戦争以来の歴史を乗り越え、今やアジアの中心大国の立場を明らかにしてきた中国との協力関係が大事です。日中協商、同盟ではありません。協商というのには、ある利害について調整して合意をつくることです。特に東シナ海の領土、海底資源問題で争っていたら、いつ戦争が起

こるかもしれません。しかしその問題について枠組み合意をしたら、日中は戦争するのではなくて協力するのだ、同行してやっていくのだ、というかたちが出てきます。これが協商です。「日米同盟」プラス「日中協商」。その枠組みをつくるうえで、このたびシンガポールであつた東アジアサミットで、福田首相は日本、中国、韓国の三国首脳会談を樹立し、定例としました。ASEANプラス3の横に盲腸のようについていたものを、今度定例化して、二〇〇八年秋に第一回を日本で開く。ASEANの集まりとは切り離して独自に行う。これから、東北アジアはこの三ヶ国がリーダーシップをとらなければいけません。その中で特に大事なのは、日中のいわば共同議長体制です。中国が中心になり、中国がひとり好きなようにやっていたらみんなハッピーかというところではない。東南アジアでも「日本のような国が、もうちょっとしつかりしてよ、中国はやはり心配なところがある」と、世界中でもそういう声が起こっているんですね。四月に私はヨーロッパに行きましたけども、ヨーロッパの反中意識は強くなっていました。どうしてか。アフリカに対してエネルギー資源が欲しいからと土足でガタガタあがつていって、内部事情なんて知ったこっちゃない、うちのエネルギー増えればよいといった調子でやってくる。

「あの民度の低さが心配だ。日本のような国がもつと中国をエデュケートしてくれないければ、世界文明は困るじゃないか」とこちらに注文してくるんですね。食の安全問題もある。中国は今後も発展を続けます。けれども、はじめがあつて終わりのないものはない。必ず中国経済は破綻がきます。しかしそれで終わるのではなく、それを越えて伸びていくでしょう。中国はまちがいに二十世紀の大国になります。アメリカと並び立つ大国になるでしょう。その国の横にながら、多くの点で協力しながら、ちがうときには横から「ちがうよ」とアドバイスしてやる。かつての英米関係で、イギリスがアメリカにもつたような役割を、日本は中国に対してもたなければいけない。そのためには信頼関係が必要です。それを福田内閣が築いてくれることを期待しております。

そして、台湾問題という大変な問題があります。これには中国人は頭に血をのぼらせる。昔は歴史問題で日本にカッカしていました。もう歴史問題はある意味で卒業してきました。日本はよいことも随分しました。東南アジアにただでなく、韓国とも金大中大統領のときに歴史的和解をいたしました。中国とのあいだでも、今の胡錦濤、温家宝の政権は、歴史問題で反日暴動をやらせると自らにも痛みが生ずるということを認識したのです。

ですから、反日的な世論を中国政府は今ぎゅつと押さえています。日本との関係を大事にしたいと思っっているのです。そういうときに、こちらのほうも中国との協力の枠組みをしつかりつくつて、共同議長を務める。そして、台湾問題については、もし危機が起こったときにやるべきことは何か。日米中の首脳会談を開くことです。日本外交が中心になってアメリカと中国に対して方向性を示してリードする。そういうふうな外交能力、それが実は二十一世紀にとって必要である。日本は経済的には多少黄昏時かもしれませんが。今までのような一九八〇年代のぶつちぎりの強さはもう夢みることはできない。しかしそれで終わりではありません。経済的に日本は一九八〇年代に成功したあと、バブルに耽つて弾けて落ちた。経済ではそうかもしれませんが、まだ高いレベルにあります。そして立派な社会をもっています。立派な人材がおります。少子化といっても、人がいなくなるのではありません。シンガポールよりたくさんの方がいるのです。それに自信をもって、自分たちさえしつかりしていれば、二十一世紀、意味のある役割、よき世話役として振舞っていくことができます。中国やアメリカがどったんばったん間違つたことを夢中になってやることがあるかもしれない。そういう中でも、アジア太平洋を支える、それによって自らも

支える。そういうことができるという自信、展望をもって、皆さんのような若い世代の方々ががんばっていただきたいと思う次第です。

どうも長くなりました。ありがとうございました。(拍手)

※チャーチスト運動 一八三二年の選挙法改革後にイギリスで展開された、労働者・民衆の選挙権獲得運動